

とある不幸少年のToLOVEるな日常

ふうふう

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この作品は作者のあれ？これ上条でいけるんじゃね？と思い上条をTOLOVEるの世界にぶっ混みました。

初投稿でせうお願いします!!

目次

とある不幸な少年上条当麻	1
とある兄妹の小さな幸せ	5
とある不幸な少年とクラスメイトと…	9
とあるホームルームでの出来事	15
とある少年と保険医	18
とある教師とのお茶会？	20
とある少女のお宅訪問	23
とある少年と家出少女	27

とある不幸な少年上条当麻

「はっは、は」

空も赤く彩られてきた夕暮れ時、一人の少年が走っていた。

もうそれはランニングなんて目じゃないほどの全速力で、時に人中进行をすり抜けるように駆け、時に複雑な路地裏を駆ける。

その際少年は一切スピードを緩めない何処までも全力で走る。

えっ、なんでそこまで全力で走るかつて？

フッフッフ、なら答えて差し上げよう。

其れは少年のうしr『マテヤゴラー!!!』ろにいるイカツイ格好のお兄さん？達と絶賛《捕まったら最後恐怖の鬼ごっこ♪》をしているからですはい。

「ハハッ…なんでこうなった!？」

この少年の体質を知っていつて口癖を知っている人なら分かるだろうさあ御…緒に

「不幸だー!!!」

少年の魂の叫びが木霊するのであった。

先ほど「不幸」だと言った少年上条当麻が何故追われているかを説明しよう。

少年は学校の帰り、妹に頼まれていた食材の買い出しに商店街に来ていた。

「いやー今日は何事もなく買えたぞ！しかもセールス商品の卵を買えたとは、もしかして今日の上条さんは不幸じゃないかも!!」

卵を買えただけでそこまで喜ぶ程のかとなのかな？と誰もが首をかしげるだろう。

だが万年不幸少年上条当麻にとっては、とてもとーっても重大なことである。

少年の姿は高校の制服を着ていて顔もぱつとしない強いと言えばそのツンツンした髪型が特徴的なだけの何処にでもいる普通の高校生だろう。

「さて帰るか」

しかしその少年ものつすごく不幸なのである。ある時はどぶにはまり、ある時は財布を落とし、またある時は犬の尻尾を踏み追い掛けられる。小さいことから大きいことまでさまざまな不幸が彼に降り注ぐ。

そんな不幸な上条が何事もなく帰えることができるだろうかいや出来ないだろう。

なぜなら彼の目の前には

「ねーねーその君ちよつと俺たちと遊ばない？」

いかにもチャラそうな奴等が友達を待っていたのかベンチでスマートフォンを弄っていた少女にナンパを仕掛けていたのである。

少女の方も明らかに困っているのが分かるが周りの人達は少女から目を背け関わらないようにする。

だがその少年上条当麻はそうはしなかった、あろうことかその連中に割って入り少女に声をかけるのである。

「いやーごめんごめん待ったか？それじゃあ行こうか」

そういつて少女手を取ろうとしたとき

「おいおいお前さんよ俺らが先にその娘に声かけたんよー何でしゃばってんの？」

チャラ男Aに行く手を阻まれる少女の方もいきなり現れた上条に困惑しあたふたしはじめた。

不味いなと上条は思い

「いやーこの娘俺の連れなんでそんなじゃっ!!」

そういつて上条は少女の手を握り全速力で走りにげた。

「あつ、まてこらテメーツ!!」

いきなり横取りされ逃げられたチャラ男達がやることはひとつツンツン頭の少年をぼこぼこにするために少年を追いかけるのであった。

走りはじめてすぐに上条は少女をつれて物陰に隠れる

「あのウニ頭どこいきやがった探せー!!」

その声が遠くなるの確認し物陰からでる。

少女のほうはやつと状況を理解できたのか慌てて上条に頭を下げた。

「あつあの助けていただいてあつ有り難う御座います」

それを受けた上条はやつと少女が誰なのかに気がついた。

少女は上条の通う彩南高校で同じクラスの西連寺春菜だったのである。それに気がついた上条は再び少女に声をかける

「ナンパされてたのって西連寺だったのか、善かったよ間に合って」

その声を聞いてその少女春菜もハツとする

「かつ上条君?」

まさか自分をたすけてくれたのが上条だとは思わず急に恥ずかしくなり顔が赤くなる。

そんな春菜に上条は、ははつと笑った後自分が買い出し帰りなのを思いだし慌てて

「わっ悪い西連寺、俺今日買い出し当番だった!それじゃあ俺帰るから西連寺も早く帰るんだぞ!!じゃあまた明日!!」

そういつて上条は帰路を走っていった。

「あつ」

走っていった上条の後ろ姿が消えるまで春菜は目が離せなかった。

颯爽と現れて颯爽と去っていった上条の姿は春菜には眩しくヒーローに見えていたのだった。

上条がいなくなつた方を見ていた春菜だが自分が姉と待ち合わせしていたことを思いだし慌てて姉の下へとかけていくのである。

姉と出会えた後も春菜の頭にはツンツン頭の上条のことで一杯でぼーっとしていた。

そんな春菜に姉は

「何?もしかして好きな人でも出来た?」

つと姉にからかわれたのは少女だけの秘密だ。

一方家に帰った上条は走り回って卵を割ってしまつて妹の美柑にこつてり怒られたのであつた。

「ふつ不幸だ」《ガク》

今日も地味に不幸な上条の一日だったのである。

とある兄妹の小さな幸せ

西連寺を助けて翌日。

上条家のリビングでは二人の少年と少女がいた。

「結局父さんは今日も帰ってないのか」

声をかけたのはツンツン頭が特徴の少年で、朝食の焼き魚を摘まみながら呼び掛ける。

「そーみたいだね、次の締め切りがギリギリで家に帰れそおにねーっ!!て言いながら電話越しでも分かるくらいの音でペンを走らせてたみたいだから今週は帰ってこれそうにないかもねー」

そう返した少女はダークブラウンのロングヘアをクリアビーズのヘアゴムでトップで束ねた少女、上条美柑である。大人びていて礼儀がよく顔も整っているため商店街では結構な有名人である。(本人は知らない)

「ふーん、そんなに大変ならまた俺にもアシスタントが回ってくるのかねー」

当麻は自分の父親のアシスタントをする過酷さをよく知っているため顔をしかめながらそう言った。

「お父さんのペースに合わせられるのってトウマ位だからその可能性は高いねー」

間延びた答えを返す妹に

「アシストの上達よりも当麻さん的には不幸がなくなれば良いーんでせうがねー」

と言ったところ

「あつ、其れは無理」

と真顔で返されガツクリと項垂れたのである。

作(真顔で否定する美柑さんマジパネー!!!)

「今、何か失礼なこと言われたかも!」

作(やつべ、心の声が漏れちまったぜ!!気づかれないうちにスタコラサツサーするぜっ!!)

天の声にも反応する美柑だったのである。

上条家は父、母、当麻、美柑の四人家族である、漫画家の父は毎日仕事に打ち込み仕事場での寝泊まりが当たり前、ファッションデザイナー兼モデルの母は海外で仕事をする事が多いため必然的に家のことは当麻と妹の美柑が役割分担しながら生活している。

そんな両親でも家族の仲は良好で父の仕事場に美柑が出向き差し入れや掃除の為週2回のペースで通い、連載漫画を3つも掛け持っているためよく当麻もアシスタントをしたりしている、ただし死ぬほどきつい。

海外の仕事で忙しい母も日本に戻るときにはいつも土産を大量に買ってくるためなんやかんやで家族は上手く纏まっている。

朝食を終えて美柑が洗い物を終えて学校の支度が完了したとき時刻は7時50分、学校まで二人とも十分で行ける距離なため自転車通学や電車通学などと違い結構ゆっくりでできるため基本二人とも準備が終われば8時位まではテレビで星占いを見たりする。

今日も美柑は星占いを見ていた。

最後に残ったのが自身の兄の星座と他の星座だった。

(ああまた最下位に成るパターンだなー)

と美柑は思っていた。

こんなことは過去何回も有ったしそのたびにトウマの星座は最下位に成っていた。

その為今日もそうだろうなーと頬杖をつきながら眺めていた。しかしそんな彼女の予想は大きく裏切られた。

《今日の1位は〴〵獅子座》です!!何時も不幸なあなた!、望んでないのに不幸が訪れるあなた!今日は何時もの数倍返して幸福な一日に成るでしょう!...最k》

「ぶふっ!!」

期待しないで見ていた星占いで何時も最下位の兄の星座が1位に成っていたため美柑は思わず吹いてしまった。

(うっ嘘!!毎回トベのトウマの星座が1位!!?)

まさかの展開に美柑は少しいや結構衝撃を受けていた。

星占いが終わるときちようど支度が整ったのか当麻が降りてきた。「お待たせえ美柑そろそろ時間だろ？早く行こうぜ。んん？どうした？そんな豆鉄砲喰らった鳩みたいな顔して固まって？はっはーんさては美柑の星座は最下位だったなー？」

と、美柑が星占いを見ていて自分の星座が最下位に成って落ち込んだのだと思っていた。

「でも一日位最下位でも良いじゃないか。当麻さんなんて自分の星座が一位のところを見たことn「ちいだった」いんだぜって今なにか言わなかったか？」

「だからトウマの星座が一位だったのー!!!」

その言葉を聞いて当麻は一瞬固まった何しろいままで自分の星座が一位だったのを見たことがないから美柑の言葉が信じられなかった。

「はっはっは美柑さんいくら当麻さんが不幸だからってそんな冗談はよくないっぜーはっはっは」

そう言った当麻だが美柑の目が余りにも真剣だったので当麻はしばらく黙ったのち

「…そうか一位だったか…」

「うん！なんと今日はいままで不幸の数倍の幸福となって返ってくる日何だつて！だから今日はトウマ不幸じゃないかもねー♪」

自分以上に喜んでいてくれる美柑に当麻はその事に嬉しくなり

「そうか一位だったか！…ってことは今日の当麻さんは今までと一味違うってことだな！ありがとな美柑！」

そういつて当麻は美柑の頭を乱暴にそれでいて優しく撫でた。

粹なり撫でられた美柑は一瞬びっくりしたが久し振りに兄に撫でられて胸が暖かくなったのである。

一通り美柑の頭を撫でた上条は

「さっ、そろそろ学校行こうぜ学校遅れて不幸に勝られたら堪らないもんない！」

そういつて美柑に手を差し出した。

その手を美柑は恥ずかしそうにでも嬉しそうに

「うん！」

と言いながらその手をとり当麻に引かれるように学校の分かれ道まで強く握りあっていたのである。

不幸な少年とその妹は本当に楽しそうに楽しそうにしていたのである。

その様子を見ていた近所の人たちはのちに兄妹のことを「不幸で幸福な兄妹」として知られるのであった。

その事を本人たちは知らないただその時はその瞬間が兄妹には幸せだったのだから。

たった小さな幸せでも心を繋ぐ大きな幸せ

とある不幸な少年とクラスメイトと…

美柑と別れて数分、上条は鼻歌を歌いながら自身の通う学校、彩南高校の門をくぐった。お世辞にも上手いとは言えないが彼の今の顔を見てそう言えるものはそういないだろう。

上条当麻

自他共に認める不幸な少年である。

上条を知らない生徒はこの学校にはいないだろう。

彼は別に部活動で良い成績を残しているわけでもテストで上位に入っている訳でもない。

彼は帰宅部だし成績も下から数えた方がはやい、美柑に起こしてもらわなければ何時も遅刻ギリギリ。

お世辞にも良い生徒とは言えないがそれだけで上条が全校生徒に知られるように成るとは到底思えない。

ではなぜ上条が全校生徒に知られているか、それは先ほども言ったように不幸なのだ、それはもう不幸なのだ。

授業中の先生の質問は全て上条に向かい、掃除当番も上条が任せられることが多いし、学校の自動販売機に「二千円札」を飲まれるし、まれに学食できつねうどんを頼めば食堂のおばちゃんが寛大にぶちまけてしまい全て上条にかかる。

一日に何回もの不幸に見舞われる上条に同級生だけではなく上級生、教師に至るまでこの学校に通う者たち全てに名が知られている。

しかし、いつも不幸だと嘆いている少年が今は下手くそながらも鼻歌をしながらそれかなり上機嫌に廊下を歩いているのだ。いつも嘆いている少年が上機嫌な姿に皆の中でなんとも言えない空気が漂っていた。

『おつ、おいあの上条が鼻歌歌ってやがるぞ!』『まじか!?あの上条が鼻歌だどつ!』『おいつ、誰か御門先生呼んでこい!!』『これは普通じゃないぞ!!』

…鼻歌を歌っているだけで酷い言われようである。

そんな彼に話しかけるものがいた

「よーつす、カミヤんおはようさん！どないしたんそんなキモい顔して鼻歌うとうてえ?!熱でもあるんちやうかあ?」

「そういいながら近付いてきた青く染めた髪に耳にピヤスをつけたエセ関西弁で細目の少年通称青髪ピアスと」

『にやはっはー青髪ピアスの言う通りだぜカミヤんいつも不幸だ不幸だって嘆いているやつが鼻歌でも歌えば熱でも有るんじやねえかつておもっちゃまうぜー、てか現在進行形で思ってる悪いこと言わねえ、早く御門先生に診てもらうことをおすすめるんだにやー』

金髪に染めた髪にアロハシャツ、終いには室内なのにグラサンをかけたにやーにやー男、土御門元春だった。

彼らは上条の悪友でいつもバカやっている者たちである。

そんな悪友たちに流石の上条も「お前ら上条さんがいくら不幸だからって鼻歌歌っただけで病人扱いとかいくらなんでも酷くないでせうかー!!?」というのであった。

その言葉に上条が何時もの上条だと分かりクラス全員が一斉に笑いだした。

「にやつはっはー、いやーすまねーすまねー、なに珍しく早く学校に来たカミヤんがあらうことか鼻歌を歌っているとは思わずこいつはカミヤんなのか?!?って正気を疑っちゃまったぜえ?」

土御門の言葉に皆ウンウンと頷く。

「なにそれヒデエー!?!、お前ら上条さんをなんだと思っっているわけえ!?!」

『不幸!!!』

「一言?!上条さんの存在って不幸の一言で片付くのかあ!!?!」

『うん!!』

抗議する上条に全員一致で肯定された。

「そつ、そつでせうか」

上条はガツクリ項垂れたのである。

「それはそうとカミヤん今日はなんでそない上機嫌なん?いつも不幸だー不幸だー言うてんのに?」

青髪ピアスが聞いてきた。

「ふっふっふ聞きますかー？聞きますかー？上条さんの今日の運勢を」「いやいい」「おいつ！聞けよ！聞いてくれよ！」

なぜ自分が上機嫌なのか理由を語ろうとした瞬間断られ上条は涙目で抗議した。

「ごめんごめん、カミヤん弄るのおもろうて調子のり過ぎたわ。つで？運勢がどないしたん？いつも通り最下位じゃないん？」

やっと話を聞いてくれる雰囲気になったので上条は再び語る。

「ふっふっふ、残念でしたー今日の上条さんは一味違いますよー、何せ今日の星占い上条さんの星座が一位なんだからなっ！！」

それを聞いたクラスメイトたちは面食らった顔をしたのち一斉に

『…ええええええええええ…！！』

驚きの叫びが轟いた

！！！！

『きつ、聞いたか皆？！あの上条があの上条であの上条のあの上条が占

いで一位だぞ！！』『信じられない！！あの上条君よ！』『今日は隕石でも

降るんじゃないかー！！』『やっぱ御門先生呼んでこい！！』

「はっはっは、だから言っただろう？今日の上条さんは一味違うってな！なんでもこれまでの不幸の数倍の幸福に成るらしい！！」

高らかに笑って言った。

その時ドアが開き西連寺春菜が入ってきた。誰かを探しているのか顔をキョロキョロさせながら教室を見渡しその目が上条をとらえると上条のもとへ小走りできた。

「かつ、上条君！！おつ、おはよう！！」

上条に勢い良く声を掛けた。

「ん？西連寺か、昨日ぶりだなあ、ちゃんと帰れたか？」

そう言って春菜に笑い掛けた。

「うっ、うんー！あのとお姉ちゃんと一緒に帰ったから大丈夫だよ！！」

あのと姉と合流したあとも春菜は上条の事を考えていて姉にからかわれたことを思いだし顔を赤くしながら言った。

「ははっ、それはよかった、あのと着いていってやれば良かったけど生憎買い出し当番だったからなー」

上条は頭をポリポリしながら申し訳なきように言った。

「きつ、昨日は本当にありがとう！あつ、あのつ、昨日のお礼にクッキー焼いてみたの!!良かったら食べて!!」

そう言つて春菜はクッキーの入った小包を渡してきた。

「ははっ、そんなの別によかったのに律儀だなー、有りがたく貰うよ。今食べて良いか?」

上条は小包を受け取りながら尋ねる。

「うっ、うん上手く出来たか自信ないけど…」

そう言つて勧めた。

許しを得たため上条は小包からクッキーを取り出し口に放り込んだ。

『あっ!!』

上条が女子からのお礼、つまりプレゼントをもらいそれを迷いなく食べてしまったため周りにいた男子達が声を挙げた。

食べた本人上条は

「うまつ!!なんだこれ!店に出しても金とれるぞ!!」

いやー西連寺は料理が上手くて優しい良い奥さんに成るんだろうなー」

そう言つて一人でウンウン納得している上条に

「えっ、良い奥さん!」

春菜は上条が何気なく言った奥さんという言葉に反応し

(おっ、奥さん?奥さん…上条君の奥さん…)

頭が蒸発するほど妄想を繰り返していた。そして我に返り

「じゃっ、じゃあお礼も渡せたから私席に戻るねっ!!」

そう言つて自分の席に走つていった。

それを強い目で見つめる少女が二人いた。

(くっ、クッキー…その手もあるのですね!…でもおしぼりも負けてないはず!!)

ひとりは黒髪ショートカットの少女五和と、

(当麻君ってどんなプレゼントが喜ぶかなー?)

ピンクの髪を肩辺りで束ねた少女鳴護アリサだった。

上条はクッキーの残りを仕舞おうとした瞬間背後から殺気を感じた、思わず振り返るとそこには血の涙を流しながら上条を睨み付ける男子達がいた。

『おい、見たか野郎共!!』『ああ見たとも』『くっそ、なんで上条ばっかり!!』『これがカミヤン病か!!なんて強力な!!』『悪い芽は早めに摘んだ方がいいよなあ皆!!』『おお!!そうだ今日こそ思い知らせるときだ』

『リア充は死す!!!掛かれー!!!』

『おおおお!!!』

!!!!!!

「つえ?え?ちよつとお前らいきなりなnゴフウツ!？」

一斉に襲いかかってきたクラスメイトたちに上条は成すすべもなく押し倒されぼこぼこにされるのだった。

そんな彼らを止めたのは

「いい加減にしろ貴様ら!!もうホームルームは始まっている!!」

その声に男子たちは固まるそして男子たちは声の方向を見る、そこにいたのは中学生位の黒髪ゴスロリ少女だった。

『那月ちゃん!!』

《バンツバン、バン》

声の主の名前を言った男子たちの額に次々にチョークが投げられていく。

『ギャー!!!』

悶絶する男子たちに声の主は言う

「教師をちゃん付けて呼ぶな!!さっさと席につけ!!」

那月の号令で男子たちはしぶしぶ自分の席に戻っていった。

「上条、貴様も早く席につけ!」

那月は上条に声を掛ける。

「うー、不幸だ…あつ、ありがとうございますごぎいます南宮先sゴポツオ!!!?」
ふらつきながら起き上がり助けてくれた教師に礼を言おうとした瞬間上条の額にチョークがぶつかる。

「ちよつ!可笑しくくないですか南宮s(ブウンツ)うおっ!!」

俺れは先生にちゃん付けてないじゃん!?なんでチョーク投げら

れるの!？」

確かにその通りである上条は那月のことをちゃん付けで呼ばないのだ、ならなぜ上条にチョークが投げられているかと言うと

「貴様はなぜちゃん付けしない!!!」

なんと那月は自分をちゃん付けしない上条に起こっていたのだ。

「ちよつと、南宮せんせ(ブウンツ)うおっ!!ちよつ、さつきと言つてること違ってません!?みなみY(ブウンツブウンツ)ちよつ、チョーク増やさないで!!上条さん死んじやう!!てか、どんだけあるんだよ!？」

「なら私をちゃん付けで呼べ!!」

「ちよつ、先生にちゃん付けはできな(ブウンツ)わつ、分かりました言います言いますからチョーク投げないで!!那月ちゃん!!」

ピタッ

無限に投げつけられるチョークを恐れた上条が那月をちゃん付けで言ったことにより那月はいいにチョークを投げるのを止めた。

「はーつはー、ちよつと酷すぎやしませんか那月ちゃん?」

「ふんっ、貴様が素直にちゃん付けで呼べば良かっただけだ。何せ貴様は唯一私がちゃん付けを許した男だからな」

顔を赤く染めながら言う那月に、

「ええーつと、これは誇るべき?」

ガードの固い那月が上条にだけちゃん付けを許した理由を知ることが上条にだけは全く理解できていないのであった。

それを見ていた男子たちはさらに血の涙を滲ませ、恋する女子三人はライバルの多さに苦難し、1人の少女は肩の凝りをほぐそうと健康器具を取り出し、その他の女子たちは修羅場のできつつあるこの空間でニヤニヤしていたのである、

「んー、なんだかなー」

上条はなぜあんなことを言われたのか考えて結局答えの出ぬまま今日を過ごしたのである。

とあるホームルームでの出来事

星占いが一位のお陰なのかはたまた美柑の笑顔パワーのお陰なのか今日の上条は本当に一味違っていた。

教師の質問が集中するのわ変わりないが、どの質問にも正解し、体育の授業ではバスケットで活躍し、学食でおばちゃんにおまけで唐揚げを貰ったりと何時もの上条では考えられない一日に成っていた。

何時も不幸と嘆いていても今現在運氣最上級なため上条の機嫌も最上級となっていた。

「フーフンフー♪」

「いやーなんでしようねー、今日の上条さんの運気の良さわ！いやーこれも星占いと美柑のお陰なのかねー」

上手くもない鼻歌を歌いながら帰る準備をしホームルームが始まるのを待っていた。

「確かに今日の当麻君は何時もよりいきいきしてるよね」

話しかけてきたのは鳴護アリサ。

学園1の歌姫であり上条に恋心を抱く少女の一人である。

「アリサか、そうなんだよー今日の上条さん不幸じゃないんだよ、実際に見たわけでもないし美柑から聞いただけだから本当に一位を取っていたのか分からないけどここまで付いてたら信じるしかないよなっ!!」

学園でトップクラスの人気を誇るアリサと話をしている上条に周りの男子たちは目を修羅にしながら睨み付けていたが上条は気付かない。

「まあ星占いよりも美柑の笑顔が今日の上条さんの力になってくれるのかねー。何せ俺よりも喜んでくれたんだぜっ!」

「ふふっ、美柑ちゃんも嬉しかったんだよ」

「そうなのかねー、でもあんなに笑った美柑久し振りに見たからそうなのかもねー」

「きつとそうだよ、美柑ちゃん普段大人びてるけどやっぱりお兄ちゃんに良いことがあると自分も嬉しくなるんだよ。」

「ははっ、だといいな」

アリサと他愛のない話しながら待っていると教室のドアが開き担任の南宮那月、通称那月ちゃんが入ってきてホームルームを始める。「…今日報告することは以上だな、テストも近いからしつかり勉強するように、それではホームルームを終わる。それと上条このあと〃私の部屋〃に来るように」

そう言った那月に上条はなぜ自分が呼ばれたのかを聞いた。

「ちよっ、ちよっとなんで俺だけ!？」

「話があるからに決まってるだろう。逃げずに来るんだぞ」

それだけ言うとな月は教室を出ていった。

「カミヤんまた何かしでかしたんか？那月ちゃんに呼ばれるとか羨ましいわー」

「全くだ、教師の中でも特に人気の高い那月ちゃんに呼び出されるとかご褒美以外の何者でもないんだにやー」

そう言ってくる青髪ピアスと土御門である。そんな悪友たちに上条は抗議する。

「いやっあれの何処が羨ましいの!?!前に行ったときなんてレポート百ページも書かされたんだぞ!!」

抗議する上条に土御門たちは

「そりやーカミヤん、毎回毎回遅刻するわ授業中寝るわおまけにたまに大怪我して学校に来るやつが教師の目に止まらない道理は無いんだにやー。諦めておこられることだな。」

と、突き放される。

不幸に愛される少年上条は良く怪我をする。

その大半が誰かを助けて《大半が女の子》おった傷で、助けた女の子の大半が上条の魔の手に落ちていいるのだが上条本人は自覚なし。

土御門の的確過ぎる評価に思い当たる節が有りすぎて上条は苦い顔をした。

「はあ、仕方ない。じゃあ俺は南宮先生のところよっていくよ。」

「おう、精々ガンバリやー」

「骨は拾ってやるからなー」

「勝手に殺すな！」

馬鹿なことを言いながら上条は教室を後にし那月の待つ職員室へと足を進めるのだった。

とある少年と保険医

上条は那月の待つ職員室へ向かっている。

「今日は何のようなのかねー、上条さんここ最近は何とかなんすけどねー」

昨日不良共に追われていた奴が良く言うよと思うが実際それでもぬるい方である。

酷いときは強盗に巻き込まれたり、見ず知らずの者にナイフを突きつけられたりと不幸通り越して呪いのレベルなのだから、先日はまだましな方である。

そのたびにぼろぼろになりながらもしぶとく生きているのだからまた不思議である。

そんなことを言いながら歩いていると上条を呼ぶ声があった。

「あら、上条君、また南宮先生に呼び出しを受けたのかしら？」

「ん、御門先生？」

声があった方に顔を向けると見知った女性が手を振りながら近づいてきた。

「フフツ、相変わらず面白い顔をしているわね君は」

そう言っただけで話しかけてきた女性は、大人の色気を漂わせ白衣の上からでも分かる立派なおっぱいぶんげふん

っと、とにかく魅力的な女性は彩南高校の保険医である御門涼子である。

美人でそれでいてお茶目なところがあるため男子生徒だけでなく女子生徒からも人気の高い先生である。

「面白いって、俺今どんな顔してますか？」

ジト目で御門を見る上条。

「フフツ、ゴメンゴメン、君がいかに不幸ですよって顔してたものだからちよつと、からかいたくなつたのよ。」

「いいですよー、どうせ上条さんは年中無休で不幸ですよー、今日だけは何事もなく終わりそうだったのに今から厄介ごとに足を突っ込むんですからねー…はあ」

半ばやけくそ気味に言う上条に御門は少し悪いことをしたかなーと、苦笑した。

「フフツ、君も相変わらずねえ。でも、余り無理しちゃ駄目よ、いくら君の回復力がずば抜けてるからって、そうしょっちゅう怪我されたら敵わないんだから」

ホントに心配してるんだから、という目で見られた上条は頭を掻きながら苦い顔をした。

怪我を良くする上条は、当然保健室の常連で良く御門の治療を受けており心配をかけさせているから御門には頭が上がらないでいる。

「うっ、面目ないです…」

上条は本当に申し訳ないという風に頭を下げた。

「クスッ、まあ私が言っても君が無茶をするのは分かってるから諦めてるんだけどねー」

御門は上条と出会ったときのことを思い出しながら言った。

自分と初めて出会ったときも上条は誰かを助けるためにぼろぼろに成りながら戦っていたのを御門は覚えている。

「でも、心配してるのはホントよ？だから余り無理はしないでね」

御門に上目遣いで言われ上条はうっ、としてしまう。

「じゃっ、じゃあ俺南宮先生に呼ばれてるんで失礼します！」

居心地が悪くなった上条はそれだけ言うと那月の待つ職員室に駆けていくのだった。

「…ばか」

御門は上条の後ろ姿を眺めながらそうひとりごちるのであった。

とある教師とのお茶会？

「はあ、やっぱり御門先生には頭が上がりないなー」

先ほど御門から逃げるように別れたため少しいたたまれない気分
でいた。

何時も迷惑をかけていることを自覚しているためより強くそう感
じていた。

「今度、差し入れでも持っていくか…」

御門は学園の保険医だけでなく自宅では診療所を開いており、上条
自身よく世話になっていているため今度差し入れでもしようと考えた。

そんなことを考えているうちに上条は那月いる職員室に来ていた。

職員室と言ったがこの部屋は那月専用部屋で本来の職員室から離
れたところにこの部屋は合った。

扉も木製の両開きドアで部屋の中は那月の私物が置いてあるから
もはや職員室と言うよりも那月の部屋と言ったほうがいいかもしれ
ない。

「しかし、相変わらずデカイ扉だなー、部屋の中も広いし、校長室より
良いだろ絶対？」

そんなことを言いながら上条は扉をノックする。

コツコツコン

「ん、上条か入れ」

中から那月の声が聞こえ許しを得たため上条は扉を開く。中では
那月が紅茶を飲みながら上条のことを待っていた。

「えらく遅いではないか、また厄介事に巻き込まれたのか？」

「失礼します、ええーつと御門先生と話してたもんで少し遅れました。
てか、今から厄介事に巻き込まれるんじゃないですよねー？」

皮肉を言われたためジト目でそう返す。

「フツ、なにそう身構えるな。少し聞きたいことがあるだけだ。まあ
座れ紅茶を出そう。」

那月はその視線を受け流しながらそう言った。

上条はその言葉に従い高級そうなソファーに腰を下ろした。

「それで、今日は何のようなのかね？ 南宮先せ e (ボンツ) グホオツ！ なに!? 何いきなり教卓なんて投げるんですかねー!?」

「フンツ、私のことはちゃん付けで呼べと言っただろう。いい加減学習しろ」

用件を聞こうとした上条が那月のことを南宮先生と言おうとしたので那月に教卓を投げられたのである。

「いってって、て、あれ？ ずっと思ってたんですけどなんで俺にだけちゃん付けで呼ばれたがるんですかあ？ 他のみんなに呼ばれるのは嫌がるのに？」

自分がちゃん付けを要求されている理由に未だ気づけていない上条は、不思議そうに聞いた。

「そつ、それは私が当麻のことがすつ、好きだからだ馬鹿者 (ボソツ)」
那月は顔を赤く染め俯きながら言った。

「ん？ 何か言いましたか？ 良く聞き取れなかったんですけど？」

そう言って首をかしげる上条。

「何でもないっ!!」

それよりも話の続きだ。ほら、紅茶だ遠慮なく飲め！」

そう言っつて那月は紅茶を差し出す。

「でっ、俺はなんで呼ばれたんですか？ 心当たり無いんですが？」

と、紅茶を飲みながら改めつて尋ねる。

話も何も上条が入ってきて早々那月が上条に教卓を投げたため話すら始まっていかなかったが敢えてつっこまない。

「何、最近 ッコウモリ」 其の姿が確認されてな、貴様なら何か知っているんじゃないかと思つてな」

といった。

「ん？ コウモリつてたしかデビルーク星人だったっけ、生憎分らないですねー」

申し訳ないといった感じに頭を搔きながら言った。

デビルーク星人

見た目は地球人のそれだが星人から分かるように宇宙人である。

デビルーク星人の最大の特徴は悪魔思わせる尻尾である。そして

コウモリを思わせる翼を出して空を飛ぶことも出来るため那月からわコウモリと種族的に呼ばれている。

上条が住む世界では宇宙人が存在し上条は持ち前の不幸が災いしそういった者たちとも交流があった。

実は御門涼子も宇宙人で宇宙では名の通った名医なのだ。

「そうか、いやなにお前なら何か知っているんじゃないかと思っただけだ。知らないのならそれでいい。手間をかせさせたな。」

そう言っつて那月は再度紅茶を啜る。

「まあ何か合ったらその時は報告しますよ。じゃあ、俺そろそろ帰ります。昨日玉子割っちゃったんで買い直さないといけないんで」

そう言っつて上条は紅茶を飲み干し立ち上がる。

「そうか、すまないな長居させて、あと勉強の方もキチンとしておくように。」

那月の言葉に上条は苦い顔をした。

「まあ、それはぼちぼちということだ。あと、またうちに来てくださいよ美柑も喜びますから」

「そうか、ならまた伺わせてもらう」

「その時は茶菓子でも用意しておきますよ」

そう言っつて上条は部屋をあとにした。

上条が出たのを確認した那月は自分の手元の資料に目を落とした。

「お姫様の家出だど…ちっつ、また面倒なことになりおっつて」

資料にはデビルーク星第一王女、ララ・サタリン・デビルーク失踪と記載されていた。

とある少女のお宅訪問

那月と別れた上条は商店街に来ていた。

昨日不良に追われ玉子を割ってしまったため買い直しに来たのである。

「そういえば今日の夕飯は何にするのか聞いてなかったなー、参ったなを買って帰ればいいか分からない、玉子は買うとして他は何を買おう?」

上条がうーんと唸っておると後ろから声をかけられる。

「上条さん?どうしたんですか?何か悩んでいるようですが?」

声をかけてきたのは買い物かごを下げた五和がいた。

「よう、五和、お前も夕飯の買い出しか?」

五和の姿を確認した上条は軽く挨拶をしそう尋ねた。

「あつ、はい今日はシチューにしようと思って材料を買いに来ました」
そう言っただけを掲げた。

「そうなのか実は俺も何を買おうか迷っててな、玉子の方は昨日割っちゃったから決まってるんですけど他がな」

そう言っただけを掻いた。

「でしたらお作りしに伺いしましょうか?上条さんが良ければですが」
…」

五和は少し頬を赤くしながら言った。

「ん、いいのか?五和が来るなら美柑も喜ぶだろうから上条さんとしては有り難いんだが本当にいいのか?」

と上条は聞いた。

「はい、私も美柑さんに会いたかったので私の方から伺いたいくらいですよ。」ニコッ

五和はにつこりとそう言った。

「そうか、じゃあ頼めるか?」

上条の問いに、

「はいー任せてくださいー!」

こうして上条家の食卓に五和が加わったのだった。

買い物を終えて上条は五和を連れて自宅に着いた。

「ただいまーつと、ほら五和入れよ」

そう言つて上条は五和を招いた。

「お邪魔します」

五和はペコリとお辞儀して上条家へ上がった。

「お帰りートウマ、あれ？五和さんもいたの？いらつしやい五和さん」

美柑は薄手の服とホットパンツと言うラフな格好で出迎えた。

「お邪魔します、美柑さん。今日はお夕食をお供しようと言いました」

そう言つて食材の入った袋を挙げた。

「そうなんだ、ササツ入つて入つて！私も手伝うから。あつ、トウマ、

玉子は買った？」

五和をなかに入れたあと上条に聞いた。

「ああ、ちゃんと買つてきたよ。俺も何か手伝おうか？」

と言つたが

「いいよいいよ、今日は五和さんとガールズトークしながら作るからトウマはのんびりしてて。」

と言つた。

「そうか、なら仕方ないな何か手伝うことが合つたら言つてくれ、部屋に言つて着替えてくるから」

そう言つて上条は自分の部屋のある二階へ上がつていった。

美柑がキッチンに向かうと五和が待つていた。

「ごめんねー、五和さん待つた？さて今日は何を作るのかな？」

と、尋ねた。

「大丈夫ですよ美柑さん、今日はシチューを作ります。あと折角玉子を買つたのですからオムライスを作ってシチューオムライスにしましょう。」

と、五和はいえいえと言うように言つた。

「あつ、エプロンはトウマのだからちよつと大きいけど我慢してね。」

そう言つてエプロンを差し出す。

「はい、大丈夫ですよ。さあ始めましょうか私はシチューを作ります

から美柑さんはオムライスをお願いしてもよろしいですか？」

(かつ、上条さんのエプロン…) ぽっ

自分の頬が緩んでいるのを自覚しながら美柑に気づかれないうように上条のエプロンを受け取った。

(ほほう、この反応は)

だが美柑は五和の頬が赤らんでいることに気づいていた。

だから少し聞きたくなった。五和がなぜ上条に意識するのかに。

「五和さんってトウマと仲良いけどトウマのどこが良いのかな？」

と、美柑はニヤニヤからかうように言った。

「えっ、なっ、ななな、なんのことでしようホホホ」

確信に迫るその問いに五和はそんなことないですよーと言うがその顔が恋する乙女のそれだった。

「はは、隠さなくてもいいよ…でも、トウマを狙ってる女の子沢山要るから頑張らないとねー」

そう言って美柑は料理に取りかかった。

五和はしばらく呆けていたが我に帰って料理に取りかかるのであった。

「よし、完成！」

それから数十分、美柑はオムライスを五和はシチューを作り終えた。

「トウマーご飯出来たよー！」

と、二階の当麻に聞こえるように言う。

……

だがいつまでたっても返事がない、降りてくる気配もない。寝てるのかなーと思った美柑は当麻の部屋に行くことにした。

「五和さん、私、ちよっとトウマを起こしてくるね《ドゴンツ》えっ、何？」

「上条さんっ!!」

当麻を呼びに行くことを五和に言おうとした瞬間二階から大きな音がした。

突然のことで美柑は呆けてしまったが五和は当麻を呼び二階へと

かけあがり当麻の部屋のドアを開け放ち部屋に入る。
しかし、そこに当麻の姿はなく荒らされた部屋があっただけだっ
た。

そう眩き少女は部屋を見渡すそして上条と目が合う

「……ええーつと…誰?」

「俺が聞きたいよ!」

上条の叫びは最もだろうなんて言っただって自分の知らないうちに
しらない女の子が自分のベッドで裸で寝ていたのだおどろかないほ
うがおかしい

「あんた誰なんだ、てか、服着ろよ!?!なんで上条さんのベッド寝てるの
!?!」

そう指摘されて少女は初めて自分が裸であることに気がついた

「わあ!ホントだ服がない!ていうかペケが居なくなってる!?!」

「だああもうなんで裸なんだよ!取り敢えずこれ着てろ!」

そう言つて上条はクローゼットを開き中にある適当な服を少女に
投げ渡す

「わあつとつと!ええーつとありがとう」

そう言つて少女は服を着る。少女の身体には上条の服は大きかつ
たのかかなりぶかぶかだった。

その為服の首元から少女の肩が露出しておりそこから除く大きな
胸の谷間がなんとも言えぬエロさを発している

…服のことは置いておいて上条は少女と向かい合っていた少女の
顔は色白くまだまだ幼さの残るも活発そうな瞳に整った顔をしてお
りピンクの髪がその可憐さをより一層際立たせる

胸も大きく腰も引き締まっております上条よりは低いが女性にしては
高身長そして何より上条の目を引いたのは彼女のおしりから出てい
る尻尾である

(あの尻尾もしかして…)

「なああんた、その尻尾からして多分デビルーク星人なんだろうけど
なんであんたはうちにいるんだ?てか、あんたは誰なんだ?」

上条は那月との話を思い出していた故に切り出した

すると少女は驚きの声を上げた

「うんそうだよ!私はララ、ララ・サタリン・デビルーク!正真正銘宇
宙人デース!」

と、元気良く言った

そして

「地球に来てみたくて家出して来ましたー!!ニコツ」

くったいなく言い放た少女に上条は顔を引きつらせ何時もの口癖を言う

「はっ、ははは、またかまたこういう展開か：ちくしょう不幸だあああ
!!!」

これが上条当麻とララ・サタリン・デビルークとの出会いであった